

既存の枠組みにおける 防災教育の改善ポイント

慶應義塾大学 環境情報学部 大木 聖子

- ① 「防災小説」の紹介
- ② 現実離れの避難訓練
- ③ 未就学児への防災教育

既存の枠組みで改善できるポイント

■ 小中学校の避難訓練を現実的なものにする

- 余震・停電を想定する
- 次の避難行動を再検討する
 - 津波浸水域 → 高台へ避難
 - 校内に火災リスクなし → 教室待機も可, 校庭に競う必要なし
 - 引き渡し → いつ (直後に全員は非現実的) ・どこで (校庭???)

■ 幼稚園・保育園での防災教育をサポートする

- 小中学校よりも時間がある
- 保護者の意識も高い
- 小中学校の防災教育のレベルが底上げされる
- 所管省庁による違いを是正できる

「防災小説」

きっかけ：高知県土佐清水市からの問い合わせ

■ 高知県土佐清水市

- 人口 13,024人（65歳以上人口 46.3%，15歳以下人口7.5%；2020年9月末）

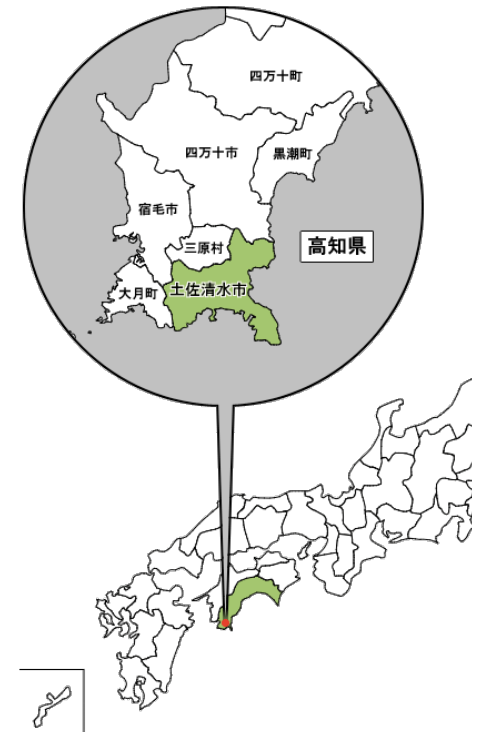
■ 2012年 南海トラフ巨大地震の新想定

■ 高知県土佐清水市：最大津波高34m（全国一）

- 人口の2.25%が死亡，6.4%が重傷，11.3%負傷.
- 市民から不安や諦めの声
 - 「次の津波で死ぬけん，もういい」

■ 2013年度より防災教育を実施

- 2016年度からは市内唯一の中学校で実施
- 2学期になり，高台に住む中学生が「防災教育に付き合わされている」と発言



発災は自分の身にも起こることだと捉えられていない！

「自分が被災したら．．」を想像して綴ってもらってはどうか？

「防災小説」：自分が主人公の発災シナリオ

- 指定された地震発生の日時と天気を条件に、
- 「その時自分は何をしているか」「どんな気持ちか」「家族や町はどうなるか」を想像し、自分が主人公の1000字程度の物語を作成。
- 物語は必ず希望をもって終わるのがルール。
- 書いてみて感じたこと、なぜこのような物語にしたか等、あとがきをつける。



- 2016年度（中1）
 - 2016年11月3日 16時30分（下校中）
 - くもり
- 2017年度（中3）
 - 2017年6月5日 7時40分（登校中）
 - 曇のち雨
- 2018年度（中3）
 - 2018年8月23日 午後（ひとりの時）
 - 暑い日
- 2019年度（全学年）

なぜ、本人と周囲に変化が起きたのか

⑤ 想定外に対峙する力をつける

他の人の綴った
「防災小説」
を聞く

④ 目指すべき自分像がわかる かけがえのない「今」を生きる



今



地震

自分の言葉で描いた
より良い未来
「防災小説」

③ 地震と向き合う 自分にとっての「今」や 「環境」の意味を見つける

軽減された被害

② 減災・防災できると知る

(このままだと)
甚大な被害

① 破滅的な状況を知る

「防災の教育」にとどめない「防災を通じた教育」

他者の尊重
お互いを認め合う

どんな町にしたいか・
どんな自分になりたいか

⑤ 想定外に対峙する力をつける

他の人の綴った
「防災小説」
を聞く

自分の言葉で描いた
より良い未来
「防災小説」

③ 地震と向き合う
自分にとっての「今」や
「環境」の意味を見つける

④ 目指すべき自分像がわかる
かけがえのない「今」を生きる

軽減された被害

共助の考え方・
スキルの習得

地震学者が得意

② 減災・防災できると知る

内閣府や県が
想定を作成



今

直後の身の守り
方を教える



地震

(このままだと)
甚大な被害

① 破滅的な状況を知る

「防災小説」まとめ

- 「防災小説」の効果：
 - 発災を自分のこととして考えることができる。
 - 起こりうる困難に向き合う中で、目指す自分像が描けたり、当たり前前の日常に感謝したりする機会となる。
 - 他の人の「防災小説」を共有することで、発災時に備えるべきことが多くリストされる。見落としていたことに気づける。
 - 小説の主人公の行動から、防災教育の効果を見ることができると。
 - 地震科学の不確実性、発災時に起こる事象の不確実性を、数値（確率）以外の方法で伝達することができる。

現実離れした避難訓練

地震の実態に合わない避難訓練



⚠️ 先生が指示して机の下に入る？！

- ✓ 立っている先生より、座っている子供たちが揺れに気づく。
- ✓ そもそも強い揺れでは話すことが困難。

⚠️ 校庭にいるなら中央に集まってしゃがむ？！

- ✓ 震度6では「自分の意志で行動できない」。
- ✓ 強い揺れの渦中に移動するのはほとんど不可能。

⚠️ 校庭集合を校内放送？！

- ✓ 非常用電源のある学校？
- ✓ 耐震性のある校舎を出て、わざわざ校庭に集合する理由は？
 - ・ 津波リスク／火災発生が分かってから出るのでは遅い／・・・

⚠️ 訓練の評価は集合までにかかった時間？！

- ✓ 命があって、ケガがないから校庭に集合できる。
- ✓ 「揺れから命を守る」部分こそ、評価すべき項目では？



落ちそうなもの・倒れそうなもの・移動しそうなもの



地震が起きたら、どうする？

① ろうかに出る

② つくえの下

③ イスの下









!

!

!

!

!

ショート訓練で体得

45分授業のうちわけ：

- 前半の25分：自分が写り込んでいる写真を使って危険さがし
- 後半の20分：教室内でショート訓練&特別教室に移動してショート訓練

ショート訓練とは：

- ① 10分くらいの短い訓練. 揺れで**身を守る部分だけ**をやる（主体的）
- ② **クラスを前半と後半にわけて、振り返りを挟みながら**やる（対話的）

ポイント：

- クラスごとに好きなタイミングで行う
- 合図となる音（緊急地震速報の報知音など）を使う
- **必ず振り返りをする**
 - 「どうしてピアノにしたの？」「だんごむしのポーズで合ってる？」「誰のポーズがよさそう？」「みんなならどうする？」

ショート訓練で体得

短期間に複数回やる：

■およそ**2～4週間に4回**を目安に。例：

- 1回め（月曜 45分）：写真の授業 + ショート訓練（クラスごと）
- 2回め（金曜 10分）：専科の時間，告知あり，ショート訓練（クラスごと）
- 3回め（翌月曜 10分）：掃除の時間，告知あり，ショート訓練（全校一斉）
- 4回め（翌水曜 10分）：告知なし，避難訓練（全校一斉）

■短期間に複数回のショート訓練を実施した学校からの報告：

- 「連続的に行うごとに判断が早くなっていく」
- 「判断の根拠がしっかりしてくる」
- 「子供達が，もっと難しい状況でもやってみたい，とか，こういう状況だとどうするのがいいだろう，といった主体的な発言をするようになった」

2017年7月19日 横浜市 震度 3



3 密を避けた避難訓練の手引き

Step 1

いきなり訓練をせずに、まずは学校内の写真を使って、危険探しをする。

※ 自分のクラスの写真だと盛り上がります。



Step 2

クラスを2つに分けて、教室で訓練をする。前半・後半に分けて、気づきを共有する。

※ 理科室や家庭科室だと応用力がつきます。



命を守る3つの「ない」

落ちてこない

倒れてこない

移動してこない

危険探しは「落ちそう・倒れそう・移動しそう」を見つけることでできる！

ショート訓練のポイント

主体的・対話的で、深い学びのある訓練

- 揺れから瞬時に身を守る部分だけをやる。全体で訓練する必要はない。
- クラスごとに好きなタイミングでやる。
- クラスを2つに分け、振り返りをする。
- Step1をやるのは初回だけ。以降はStep2の部分のみ。10分でできる。
- 連続でやると体に定着する（週1回を4週連続）。年に一度、連続でやる月があればとよい。

「シヨート訓練」まとめ

- 「シヨート訓練」の特徴：
 - 「危険か安全か」ではなく「どの程度のリスクか」を主体的に判断.
 - クラスごとに好きなタイミングで, 10分で完了.
 - 瞬時の対処行動を体得.
 - 自分自身と, 友人と, 対話する深い学び.

幼稚園・保育園での防災教育

現状の課題

- 『東日本大震災における学校等の対応に関する調査研究報告書』(平成24年3月・文部科学省)
 - 対象：岩手・宮城・福島県
 - 「日常的に防災について校内で検討・協議する機会があったか」
特別支援学校「95.1%」、高等学校「75.3%」、小学校「68.9%」、中学校「53.0%」、**幼稚園「46.6%」**
- 義務付けられている訓練は所管によって内容・頻度が異なる(文科省と厚労省で違う)
- 現場の声「毎月やってはいるものの、いま取り組んでいる訓練が、発災時に本当に役立つのか分からず不安」

発災直後：ここだけは抑えよう

■絶対に抑えるポイント：

- 余震は必ず発生する
- すぐに迎えに來れない保護者は必ずいる

■立地に応じて必要なポイント（首都圏）：

- 耐震性があるなら、やみくもに避難しない
- 火災への対応
 - 煙が2本見えたら広域避難場所へ避難を開始する
 - どんな建物にいても避難誘導灯を目印にする
- 引き渡すまでの避難生活
 - 保育所を最高の避難所に整備する

紙芝居で子供たちに伝える

余震はあたりまえ

「なまずファミリーのくしゃみ」



避難誘導灯を意識

「ゆうどうくん」



防災授業のようす



見えてきた効果

■ 教職員の変化：

- 「避難訓練と言えば防災頭巾を使って、とか、外に避難する、とか、そういう意識がもともと強くあったが、今では、**何を優先すべきなのか、自分の中の意識が変わった**」
- 発災時の課題を自ら発見、訓練内容を教職員で企画

■ 子供たちの変化：

- 訓練を繰り返す中で、子供達に「**地震（訓練）は、自分で対処しうるものだ**」という意識が芽生えた。
- 子供たちが訓練を「保育所の活動の一つ」と捉え、**前向きに取り組める**ようになった。主体的に動けるようになってきている。

■ 保護者の変化：

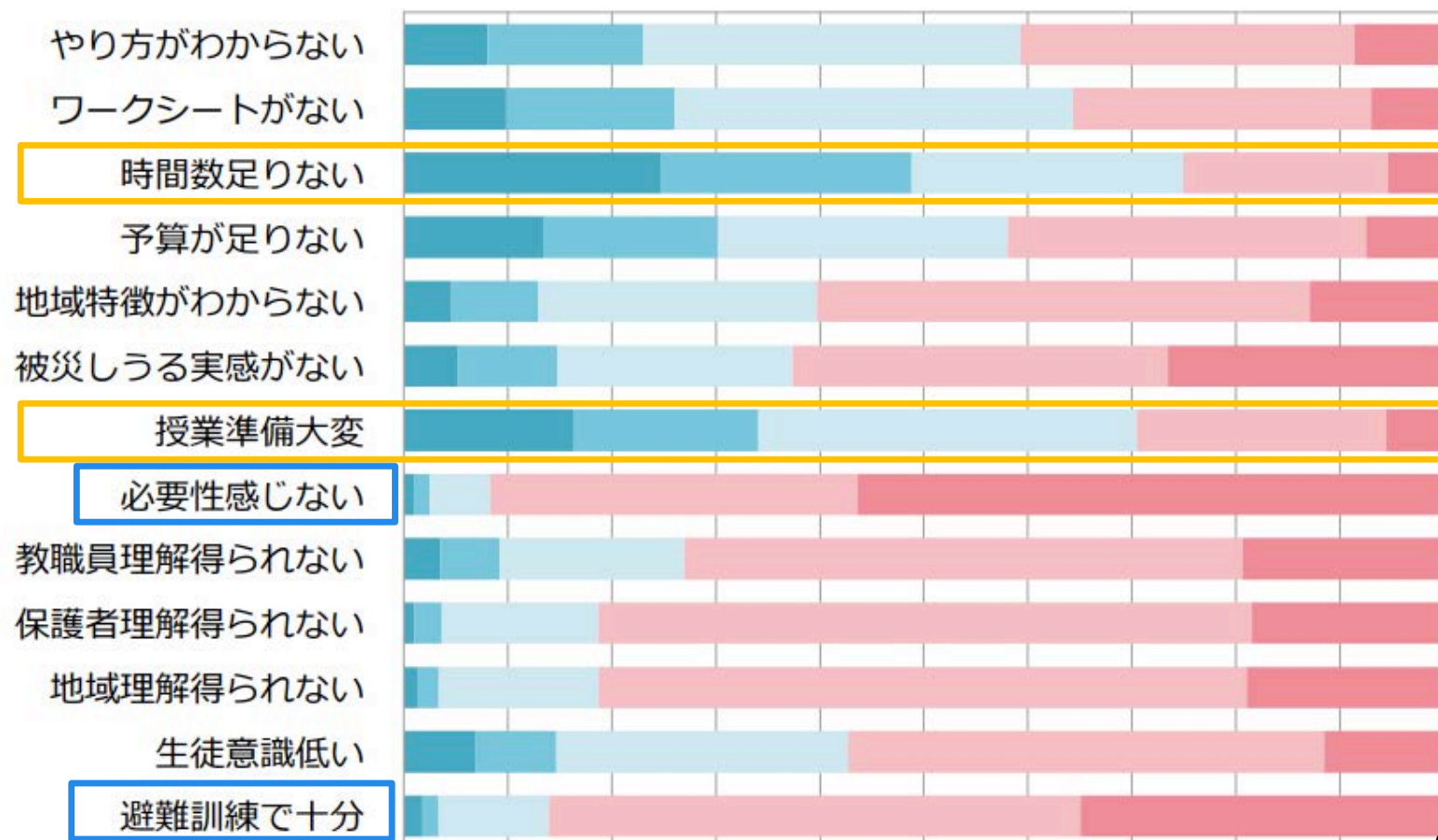
- 子供が嬉しそうに防災活動を話してくれる／備蓄をするようになった／「ま、地震は起きないだろう」とは思わなくなった

防災教育をするにあたっての障壁

■ 対象：宮城県・埼玉県・愛媛県の教員（幼小中高特支399名）

■ 非常にそう思う ■ 強くそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない ■ 全くそう思わない

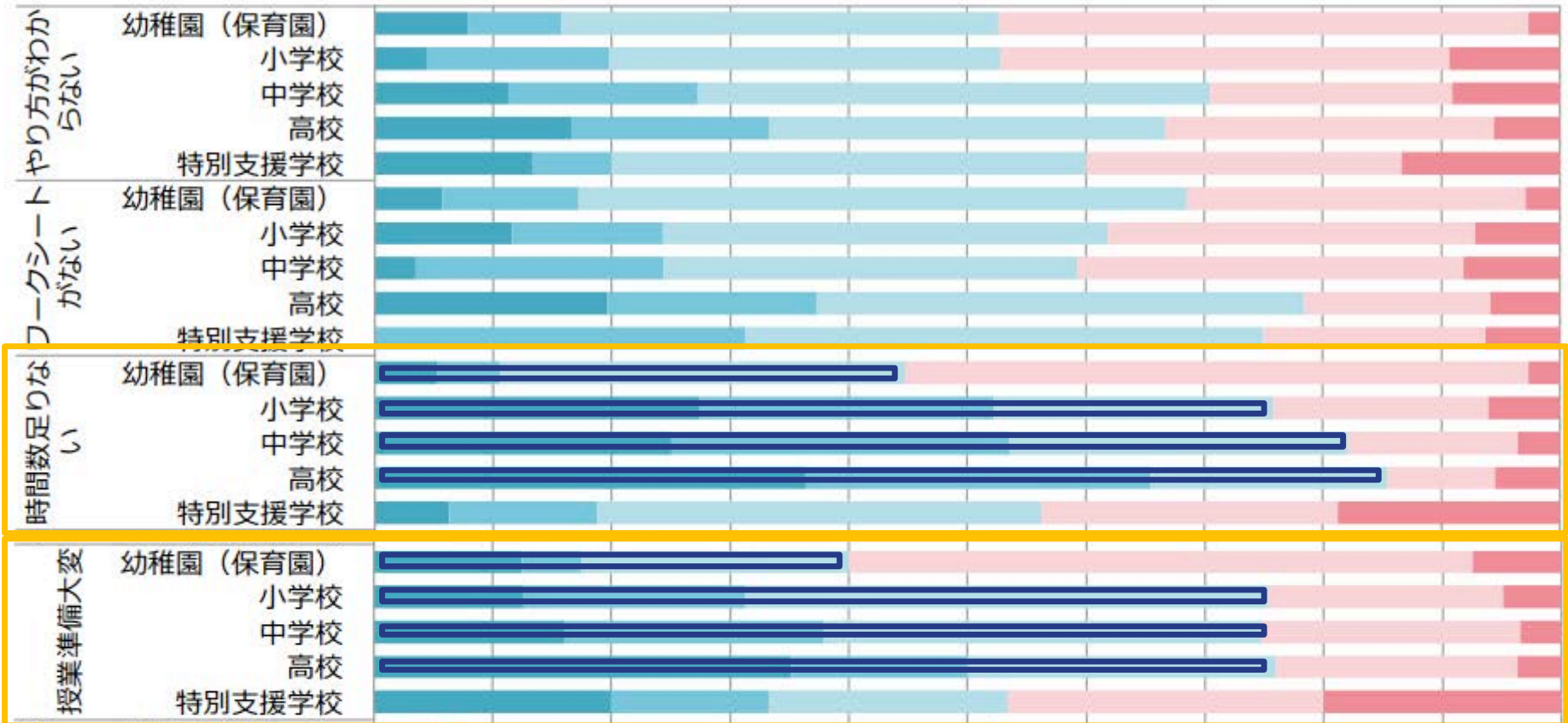
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



時間の融通： 幼保 >> 小中高

■ 非常にそう思う ■ 強くそう思う ■ そう思う ■ あまりそう思わない ■ 全くそう思わない

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



幼保には、防災教育に使える時間がある！

未就学児への防災教育の合理性

- 防災教育に割ける**時間が小中学校よりもある**
- 子供が小さい方が**保護者の意識が高い**
- 幼保で防災してくれば、小中学校の防災教育が楽になる
- 所管省庁（文科省・厚労省）による義務付け内容の違いが存在

既存の枠組みで改善できるポイント

■ 小中学校の避難訓練を現実的なものにする

- 余震・停電を想定する
- 次の避難行動を再検討する
 - 津波浸水域 → 高台へ避難
 - 校内に火災リスクなし → 教室待機も可, 校庭に競う必要なし
 - 引き渡し → いつ（直後に全員は非現実的）・どこで（校庭???)

■ 幼稚園・保育園での防災教育をサポートする

- 小中学校よりも時間がある
- 保護者の意識も高い
- 小中学校の防災教育のレベルが底上げされる
- 所管省庁による違いを是正できる